



Title	投票率と1910年総選挙
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪大学英米研究. 2013, 37, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99366
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

投票率と 1910 年総選挙

岡田 新

1

戦場における死者の数ではなく、票を投じた人間の数で権力闘争に決着をつける。選挙制度の意味がここにあるとすれば、戦場である投票所へ足を運んだ人々の数が、選挙における最も重要な指標になるのは当然である。事実、投票率は有権者の選挙への関心を表す最も重要な指標と一般に考えられている。

しかし 1885 年から 1918 年まで続いた第三次選挙法改正後の選挙制度の下では、投票率は、有権者の関心をそのまま反映しているとは言い難かった。この時期の選挙制度の下では、各選挙区の有権者数は、人口の動態を直接に反映していなかった。各政党は活動家を配置し、自分の支持者を有権者に登録させるため、しのぎを削っていた。各選挙区の有権者数は、こうした政党の活動の成果であった。このため、有権者の数から算出される投票率も、有権者の選挙への関心を映す指標としては、必ずしも十分な信頼性を持っているとは言えない。

だが 1910 年 1 月と 12 月の総選挙だけは事情が異なる。1910 年の 2 つの総選挙では、全く同じ有権者リストが用いられた。このため、この 2 つの総選挙に限って言えば、投票率の違いは、同じ有権者のそれぞれの選挙への関心を映した指標として扱うことができる。

「人民予算」を契機にした貴族院と庶民院の対決という憲政危機の真只中で行われた 1910 年の 2 回の総選挙は、政党が獲得した議席を見る限り、大きな変動がなかった。しかし別稿で指摘したように、各政党の得票率を詳細に分析すると、2つの総選挙には興味深い違いがあった。統一党(Unionists)と直接対決した選挙区における自由党の得票率は、12 月総選挙では 1 月総選挙と比べてわずかに低下し、選挙における決定的な分水嶺である 50%を割り込んだ。自由党は、こうした選挙区でいわば土俵際に追い詰められつつあった。一方、統一党と直接対決した選挙区における労働党の得票率は、自由党よりさらに低下した。だがこうした選挙区での労働党の統一党に対するリードは、なおかなり大きかった。また自由党と労働党の支持者は、保守勢力の候補者に対して結束して戦う時、以前の総選挙と同じく強固に結束していた。しかしそうでない場合、両党の支持者の結束は、必ずしも強固なものではなくなっていた。¹⁾

こうした 2つの選挙での戦況は、投票率の変化とどのように関係していたか。この点を掘り下げることで、1910 年の 2つの総選挙についての分析を補うことが本稿の課題である。

2

まず 2つの総選挙における全般的な投票率の変化について検討しよう。2つの選挙の投票率の基礎的な統計量と分布をみると、議席の上では大きな変化がなかったのに対し、投票率という側面から見ると、2つの総選挙の戦況は大きく異なっていたことが明らかとなる。まず 12 月総選挙では、1 月総選挙から大幅に無投票選挙区が増え、実際に選挙が行われた選挙区は 60 以上減った。しかも 12 月総選挙で選挙が戦われた選挙区での投票率は、1 月選挙に比べて最大値も最小値も低下し、平均投票率も 4.8%と大きく下落した。投票率の分布をみると、投票率 90%を越していた選挙区が、12 月総選

挙では大きく減少し、その代わりに 12 月総選挙では 1 月にはなかった投票率 70%以下の選挙区が現れた。その結果、投票率の分布は、左に長く裾を引いた分布に変わった。12 月総選挙の投票率の分布は、1 月総選挙と比べると、左への歪みが拡大し、90%辺りにあった尖りが減ってなだらかになっている。こうした投票率の変化は、1 月総選挙時に全国の選挙区で充満していた熱気が、12 月総選挙ではかなり失われてしまったことを雄弁に物語っている、と言ってよい。

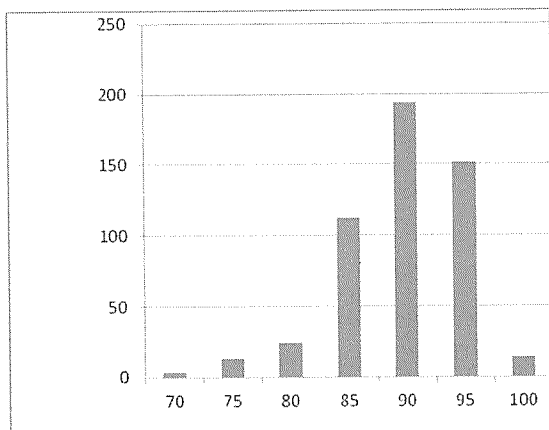
しかしこうした全般的な投票率の分布は、1 票制の 1 人区と 2 票制の 2 人区の違いや、選挙区における政党の対決の組み合わせを考慮しないで、大雑把に全選挙区を概括したものに過ぎない。投票率の変化が、どのような影響を選挙結果に及ぼしたかを考えるためには、1 人区と 2 人区それぞれのカテゴリーにおける政党の対決のパターンに即して、投票率と各政党の得票率の変化の様相を分析する必要がある。

1 人区における 1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙における政党の対決の組み合わせは、表 3 に示した通りである。表 3 の括弧の中の数字は、それぞれのカテゴリーでの投票率の変動を表している。

表 3 をみると、政党の対決の構図によって、投票率の変動も異なっていたことが分かる。まず統一党と自由党の一騎討ちが続いていた 275 の選挙区を取り上げよう。こうした選挙区は、517 ある 1 人区の 53%を占め、選挙の主戦場であった。この 275 選挙区を対象に、1 月総選挙と 12 月総選挙での自由党の得票率の変化と投票率の変化との相関を求めても、相関係数は極めて低く ($r=0.08$) 両者の間に積極的な相関は認められない。一般的には、投票率の低下が自由党の得票率の低下を招いたとは言い難いことが分かる。

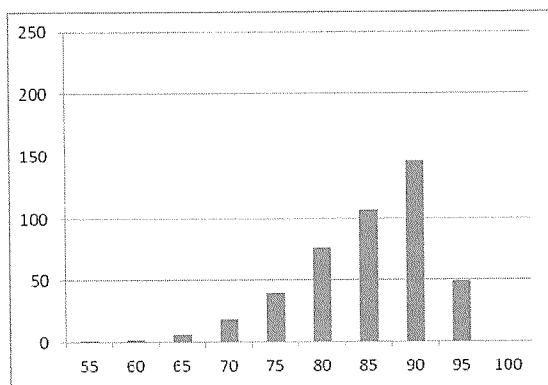
投票率と1910年総選挙

図1表1 1910年総選挙投票率の分布と基礎統計量



個数	511
最大値	97.4
最小値	69.7
平均	87.3
標準偏差	5.15
歪み	-0.81
尖り	0.83

図2表2 1910年12月総選挙投票率の分布と基礎統計量



個数	446
最大値	94.8
最小値	53.7
平均	82.5
標準偏差	7.06
歪み	-0.90
尖り	0.67

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 度数は該当する選挙区数を示す。横軸は各度数の最大値を示す。

だが1月総選挙で自由党と統一党の得票率の差が1%以内（-1%～+1%）であった激戦区16選挙区を取り出してみると、図3に掲げた散布図からも伺えるように、この激戦区の多くで、投票率の低下とともに自由党の得票率が下落した。その結果、激戦区16のうち、1月総選挙で自由党は7議席を獲得したのに対し、12月総選挙では4議席しか取れなかった。自由党は新たに議席を3つとったものの、6議席を落とした。この16の激戦区について、投票率の変化と自由党の得票率の変化の相関を調べると、相関係数は $r=0.46$ となるが、相関係数の検定を行うと、 $p=0.076$ で、5%水準（両側）では、危険率がやや高く統計的に有意とは言えない。しかしこの中で違う象限に位置する3つの選挙区（キャンバーウエル・ペッカム Camberwell, Peckham、エクセター Exeter、アイヤー地区 Ayr District）を外れ値として扱い、残る13選挙区を対象にすると、相関係数は $r=0.71$ となり、相関係数の検定を行うと $p=0.007$ で、1%水準で有意（両側）であり、投票率の低下と得票率の低下の間にかなり強い相関が見出される。（表4参照）自由党は、こうした激戦区の多くで、1月総選挙における熱気を保つことができず、投票率の低下とともに得票率を減らし、統一党とのつばぜりあいには負けた、と推定して良いであろう。²⁾

投票率と1910年総選挙

表3 1910年1月総選挙と12月総選挙の1人区における政党の対決の構図と投票率の変化

	1910年1月総選挙					
		統一党・自由党	統一党・労働党	三つ巴	その他	無投票
1910年 12月	統一党・自由党	275 (-5.3%)	4 (-7.6%)	11 (-6.9%)	42 (-6.0%)	
	統一党・労働党		26 (-7.6%)	1 (-7.5%)	1 (-3.4%)	
	三つ巴	2 (-4.7%)	1 (-7.3%)	4 (-1.6%)		
	自由党・労働党	1 (-14.1%)	1 (-12.5%)	1 (-11.7%)		
	その他	15 (-5.7%)		2 (-7.1%)	37 (-5.1%)	2
	無投票	66	3	1	17	4

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989より作成。
2. 数字は該当する選挙区数を示す。

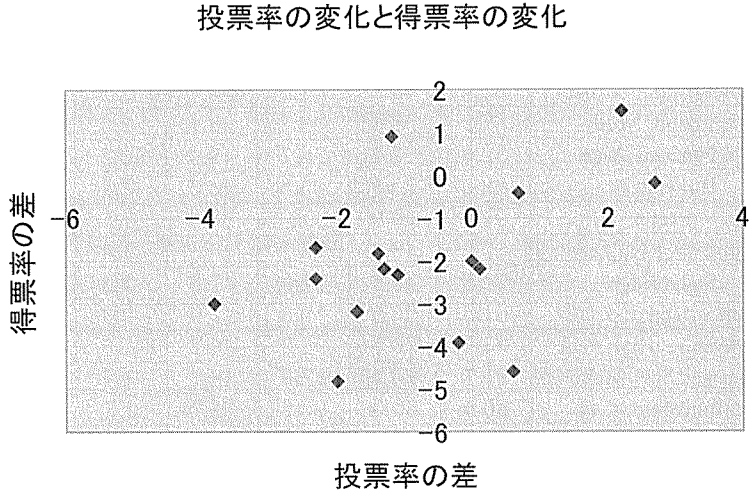
表 4 1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙における自由党と統一党の一騎討ち選挙区
の激戦区での投票率の変化と自由党の得票率の変化 (%)

選挙区	1 月総選挙		12 月総選挙		投票率 の差	自由党 得票率 の差
	投票率	自由党 得票率	投票率	自由党 得票率		
Camberwell, Peckham	85.7	49.6	81.1	50.2	0.6	-4.6
Islington, North	87.2	50.1	82.4	48.1	-2.0	-4.8
St. Pancras, West	82.6	50.1	78.7	49.9	-0.2	-3.9
Birkenhead	88.5	50.4	85.5	46.6	-3.8	-3.0
Exeter	94.2	49.9	92	50.0	0.1	-2.2
Kingston upon Hull, central	87.9	49.9	86.1	48.5	-1.4	-1.8
Stalybridge	94.3	49.6	91.9	47.3	-2.3	-2.4
Cumberland, Eskdale	81.5	50.2	79.8	47.9	-2.3	-1.7
Derbyshire, High Peak	94.4	50.5	92.2	49.2	-1.3	-2.2
Leicestershire, Melton	91.1	50.4	87.9	48.7	-1.7	-3.2
Staffordshire, Leek	90.4	50.0	90.2	52.7	2.7	-0.2
Denbigh District of Boroughs	94.8	49.9	92.8	49.9	0.0	-2.0
Montgomery District of Boroughs	91.4	50.2	89.1	49.1	-1.1	-2.3
Randnorshire	74.2	49.8	73.8	50.5	0.7	-0.4
Ayr District of Burghs	89.8	49.6	90.7	48.4	-1.2	0.9
Kirkcudbrightshire	89.8	49.6	91.3	51.8	2.2	1.5
平均	88.6	50.0 (49.99)	86.6	49.3	-2.0	-0.7

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。掲出したのは、1910 年 1 月総選挙で、自由党と統一党の一騎討ちで、得票差が 1% 以内の 1 入区。
2. 網掛けは自由党が勝利した選挙区を示す。
3. Stafordshire, Leek の 1 月選挙の自由党得票率は 50.0% となっているが、実際には 49.954% で、統一党の 5463 票に 10 票差で敗北した。また Exeter の 12 月選挙の自由党得票率は 50.0% となっているが、実際には 49.995% で、統一党 4777 票に 1 票差で落選した。

図3 1910年1月総選挙と12月総選挙における自由党と統一党の一騎討ち選挙区の激戦区での投票率の変化と自由党の得票率の変化（散布図）



注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. X軸は1910年1月総選挙からの投票率の変化を、Y軸は自由党の得票率の変化を示す。

では1月総選挙でも12月総選挙でも統一党と労働党の一騎討ちであった26の選挙区ではどうであったか。こうした選挙区では、投票率は-7.6%低下し、統一党と自由党の一騎討ち選挙区の-5.3%より2.3%も下落が大きかった。投票率の変化と得票率の変化の相関を計算すると、両者の間の相関は弱く有意確率も低く ($r = -0.27, p = 0.65$)、積極的な相関は認め難い。では激戦区ではどうであったか。残念ながら、先に自由党と統一党の場合にみたような1月総選挙で1%以内の得票差であった激戦区は、このカテゴ

リーには存在しない。だが1月総選挙で両党の得票率の差が2%以内であった接戦の選挙区として、表5に示すウールリッジ（Woolwich）とウオーリックシャーのニューニトン（Warwickshire, Nuneaton）の2つの選挙区があった。（Woolwichは1.72%差、Warwickshire, Nuneatonは1.62%差）この2つの接戦区での投票率と得票率の変化をみると、興味深いことに、12月総選挙では、投票率が1月総選挙に比べて下落したにもかかわらず、労働党の得票率はいずれも逆に上昇している。2つの選挙区しか存在しないため、これを典型とみなすことは難しい。だが少なくとも統一党と労働党が衝突したこの2つの接戦区では、自由党の激戦区の場合とは異なり、投票率の下落にもかかわらず労働党の得票率は高まり、その結果、12月総選挙では、労働党は2つの選挙区を両方とも制したのである。³⁾

一方最も投票率の変化が小さかったのは、1月総選挙でも12月総選挙でも三つ巴戦が続いてハダスフィールド（Huddersfield）等の4つの選挙区であった。表6に示すように、こうした選挙区での2つの総選挙での投票率の変化は、平均で-1.58%に過ぎない。こうした選挙区では、統一党はもちろん、自由党と労働党の支持者が、しのぎを削って2つの選挙戦を戦った。このことが、高い投票率が維持されたことに反映されたと考えられる。⁴⁾

両選挙とも三つ巴戦だったこの4選挙区について、投票率と各政党の得票率の変化の相関を調べると、統一党、労働党については、投票率と得票率の変化の間の相関は弱く、相関係数の有意確率も低く、統計的に有意な相関があるとは言えない。（統一党は $r=-0.16, p=0.84$ 、労働党は $r=-0.44, p=0.56$ ）一方自由党については、得票率は投票率の低下と肩を並べて下落し、ともに-1.6%とほぼ同じ比率で低下した。ケースがわずか4例と少ないため、相関係数を検定すると、危険率が10%を越え（ $p=0.14$ ）、統計的に明確な判定を下すことはできないものの、自由党については、投票率の変化と自由党の得票率の変化の間に、高い相関係数（ $r=0.86$ ）が算出される。

投票率と1910年総選挙

表5 1910年1月総選挙と12月総選挙における統一党と労働党の一騎打ち選挙区の接戦区での投票率の変化と労働党の得票率の変化(%)

選挙区	1月総選挙		12月総選挙		投票率 の差	労働党 得票率 の差
	投票率	労働党 得票率	投票率	労働党 得票率		
Woolwich	92.4	49.1	87.8	50.7	-4.6	+1.6
Warwickshire, Nuneaton	91.9	50.8	90.0	52.2	-1.9	+1.4
平均	92.2	50.0 (49.95)	88.9	51.5	-3.3	+1.5

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989より作成。掲出したのは、1910年1月総選挙で、労働党と統一党の一騎打ち選挙区で、得票差が2%以内の1人区。
2. 網掛けは労働党が勝利した選挙区を示す。

表6 1910年1月総選挙と12月総選挙における三つ巴選挙区での投票率の変化と自由党の得票率の変化(%)

選挙区	1月総選挙		12月総選挙		投票率 の差	自由党 得票率 の差
	投票率	自由党 得票率	投票率	自由党 得票率		
Huddersfield	94.6	39.8	90.5	37.5	-4.1	-2.3
Durham, Bishop Auckland	88	42.1	82.8	37.6	-5.2	-4.5
Durham, Jarrow	78.6	34.0	81.9	34.0	3.3	0.0
Lanarkshire, Mid	84.6	38.4	84.3	38.7	-0.3	+0.3
平均	86.5	38.6	84.9	37.0	-1.6	-1.6

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989より作成。掲出したのは、1910年1月総選挙と12月総選挙で、統一党・自由党・労働党の三つ巴戦となった1人区。
2. 網掛けは自由党が勝利した選挙区を示す。

一連の論稿で指摘してきたように、20世紀初頭の選挙では、保守陣営を共通の敵とする時、自由党と労働党の支持者は強い結束をみせた。では1910年の2つの総選挙ではどうであったか。そして投票率はどのような影響を与えたか。この点を検討するため、政党の組み合わせの変化によって、投票率がどのように変化し、両党の支持層がどのような投票行動をみせたかを調べてみよう。

まず自由党の支持層が積極的に労働党の候補に票を投じたことを証する例が、1月総選挙では三つ巴戦であったが、12月総選挙では統一党と労働党の対決区になったカンブリアの港町ホワイトヘイブン（Whitehaven）選挙区である。自由党と労働党の間で、東に隣接するコッカマウス（Cockermouhth）選挙区で12月総選挙では労働党候補を立てない代わりに、ホワイトヘイブン選挙区では自由党は候補を立てないことが協定された。このため、12月総選挙時ホワイトヘイブンでは、保守勢力と労働党との一騎討ちとなり、投票率の低下は-7.5%と大きかったものの、労働党の得票率は逆に24.9%と大きく上昇した。表7をみると、投票率が下がっているなかで、労働党は、得票を600票弱積み上げていることが分かる。統一党、労働党の支持者で、2つの選挙で別の政党に投票した有権者はごく少数であったと考えられるから、1月総選挙で自由党の票を投じた有権者のうち、ほぼ4分の3が、12月総選挙では、労働党に票を投じたのではないかと推定される。⁵⁾

一方、1月総選挙では三つ巴戦であったが、12月総選挙では自由党と統一党の対決となったブリストル東（Bristol, East）等11の選挙区はどうか。ここでも投票率は平均-6.9%低下したものの、自由党の得票率は平均10.2%上昇した。1月選挙での労働党の得票率は平均16.9%であったから、自由党の得票率の上昇は、1月に労働党に票を投じた有権者のかなりの部分が、12月には自由党に票を投じたことによるものと考えられる。事実、表

8に掲出した票数からみると、1月に労働党に投票した有権者の3割程度が、自由党に投票したのではないかと推測できる。しかし三つ巴の戦いから統一党と労働党の対決になった場合に比べると、1月総選挙で労働党に投票した有権者が12月総選挙で自由党を支持した割合はかなり低い。得票数から推測して、20%程度の労働党支持者は、12月には統一党に投票したと考えても大きな誤りはないであろう。ただしホワイトヘイブン選挙区との組み合わせで自由党と労働党の間で公式協定が結ばれたコッカマウス選挙区については、おそらく自由党候補は12月総選挙で、労働党が1月総選挙で獲得した1909票のうち1300票余りを取ったと考えられ、その結果として議席を制し、両党の協力の威力を示した。⁶⁾

他方、保守陣営と自由党ないし労働党の対決という構図からはずれた選挙区では、大きく投票率が落ち込んだ。先の表3から分かるように、投票率の低下が-14.1%と最も大きかったのは、統一党・自由党の対決が、自由党・労働党の対決に変わったグラモーガンシャー中央（Glamorganshire, Mid）選挙区であった。カーディフ（Cardiff）の西側に位置するこの選挙区では、表9に掲出した得票数からみると、1月選挙で統一党に投票した有権者のほとんどが12月には投票所には足を運ばず、1月に自由党に投票していた有権者は、12月には自由党に投票するものと労働党に投票するものにほぼ二分されたようにみえる。⁷⁾

また統一党・労働党の組み合わせが自由党・労働党の対決に変わった西隣のグラモーガンシャー、ゴウワー（Glamorganshire, Gower）選挙区でも、12.5%もの投票率の低下がみられた。産業都市スオンシー（Swansea）を含み、保守勢力が弱いこの選挙区では、表10に掲出した得票数からみると、1月総選挙で統一党に投票した有権者は12月にはほとんどが棄権し、1月に労働党に投票した有権者は、12月総選挙では労働党に投票する者と自由党に投票する者にほぼ二分されたように思われる。この選挙区では自由党は1906年に三つ巴戦で4522票をとっており、1910年12月に自由党は再びほぼ同数4527票をとっている。これらの自由党支持票のほとんどは、1

月総選挙での統一党と労働党の一騎打ちにおいては、労働党に投げられたが、12月総選挙で自由党候補が出馬すると、自由党候補にほぼそっくり回帰したのではないかと推定される。⁸⁾

だが12月総選挙では、自由党と労働党が争った場合、労働党の票数が自由党を上回る選挙区も出現していた。表11に掲出したファイフ西（Fife, Western）選挙区は、1月総選挙では三つ巴戦であったが、12月総選挙では自由党対労働党の対決に変わった。ここでは12月総選挙で、自由党は、1月の総選挙での得票を維持できなかった。逆に労働党の得票は、1400票も増加した。自由党の候補の減少分がすべて労働党候補への投票に回ったと仮定しても、統一党に投票していた有権者の内、少なくとも700票は、12月総選挙で労働党へ流れたと考えねばならない。いずれにせよ、ファイフ西選挙区の例は、自由党と労働党が対抗した場合、統一党の支持層の一部が、労働党に積極的に票を投じた場合が現れていたことを示している。⁹⁾

表7 1910年1月総選挙で三つ巴戦だったが、12月総選挙で統一党対労働党に変わった選挙区における政党の得票率

選挙区	1月総選挙				12月総選挙			投票率 の差	労働党 得票率 の差
	投票 率	統一党 得票率	自由党 得票率	労働党 得票率	投票 率	統一党 得票率	労働党 得票率		
Whitehaven	93.9	41.5 (1188)	29.7 (852)	28.8 (825)	86.4	46.3 (1220)	53.7 (1414)	-7.5	+24.9

注記

1. F.W.S.Craig ed., British Parliamentary Election Results 1885-1918 (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989より作成。掲出したのは、1910年1月総選挙で三つ巴戦だったが、12月総選挙で統一党対労働党に変わった1人区の各党の得票率。
2. 括弧の中の数字は得票数を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

投票率と 1910 年総選挙

表 8 1910 年 1 月総選挙で三つ巴戦だったが、12 月総選挙で統一党対自由党に変わった選挙区における政党の得票率 (%)

選挙区	1 月総選挙				12 月総選挙			投票率 の差	自由党 得票率 の差
	投票率	統一党 得票率	自由党 得票率	労働党 得票率	投票率	統一党 得票率	自由党 得票率		
Bristol, East	86.9	30.8 (4033)	52.0 (6804)	17.2 (2255)	76.3	37.1 (4263)	62.9 (7220)	-10.6	10.9
Middlesbrough	88	35.3 (6756)	50.5 (9670)	14.2 (2710)	77.6	38.9 (6568)	61.1 (10313)	-10.4	10.6
Cheshire, Crew	91.8	37.2 (5419)	53.3 (7761)	9.5 (1380)	86.2	43.7 (5925)	56.3 (7629)	-5.6	3.0
Cheshire, Hyde	93.2	39.3 (4461)	39.5 (4476)	21.2 (2401)	89	48.6 (5268)	51.4 (5562)	-4.2	11.9
Cumberland, Cockermouth	89.4	45.2 (4593)	35.9 (3903)	18.9 (1909)	83.8	47.3 (4492)	52.7 (5003)	-5.6	16.8
Gloucestershire, Tewksbury	86.5	53.2 (6050)	44.7 (5088)	2.1 (238)	83.4	52 (5609)	48 (5267)	-3.1	3.3
Lancashire, Eccles	92	38.7 (6682)	41.0 (7093)	20.3 (3511)	85.9	47.6 (7676)	52.4 (8467)	-6.1	11.4
Lancashire, Leigh	93.6	35.1 (4646)	40.2 (5325)	24.7 (3268)	86.9	44.8 (5507)	55.2 (6790)	-6.7	15.0
Yorkshire, Spen Valley	92.6	31.9 (3439)	44.8 (4817)	23.3 (2514)	82.4	47.4 (4545)	52.6 (5041)	-10.2	7.8
Lanarkshire, Govan	84.6	33.7 (5127)	43.1 (6556)	23.3 (3545)	79.9	43.1 (6369)	56.9 (8409)	-4.7	13.8
Lanarkshire, North-Eastern	83.8	38.4 (7012)	49.8 (9105)	11.8 (2160)	75.3	42 (7142)	58 (9848)	-8.5	8.2
平均 (累計)	89.3	38.1 (58204)	45.0 (70333)	16.9 (25891)	82.4	44.7 (63664)	55.2 (79549)	-6.9	+10.2

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。掲出したのは、1910 年 1 月総選挙で三つ巴戦だったが、12 月総選挙で統一党対労働党に変わった 1 人区の各党の得票率。
2. 括弧の中の数字は得票数を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

4. Cheshire, Crew は 1910 年 4 月に現職議員の死亡に伴う補欠選挙があり、統一党と自由党の一騎討ちとなったが、その結果は、12 月総選挙とよく似ていた。(投票率 86.2%、自由党 55.8%、統一党 44.2%)

表 9 1910 年 1 月総選挙で統一党対自由党だったが、12 月総選挙で自由党対労働党に変わった選挙区における政党の得票率

選挙区	1 月総選挙			12 月総選挙			投票率 の差	自由党 得票率 の差
	投票率	統一党 得票率	自由党 得票率	投票率	自由党 得票率	労働党 得票率		
Glamorganshire, Mid	82.7	20.4 (3382)	79.6 (13175)	68.6	55.5 (7624)	44.5 (6102)	-14.1	-24.1

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。掲出したのは、1910 年 1 月総選挙で統一党対自由党だったが、12 月総選挙で自由党対労働党に変わった 1 人区の各党の得票率。
2. 括弧の中の数字は得票数を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

表 10 1910 年 1 月総選挙で統一党対労働党だったが、12 月総選挙で自由党対労働党に変わった選挙区における政党の得票率

選挙区	1 月総選挙			12 月総選挙			投票率 の差	労働党 得票率 の差
	投票率	統一党 得票率	労働党 得票率	投票率	自由党 得票率	労働党 得票率		
Glamorganshire, Gower	80.5	21.38 (2532)	78.62 (9312)	68.0	45.2 (4527)	54.8 (5480)	-12.5	-23.8

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。掲出したのは、1910 年 1 月総選挙で統一党対労働党だったが、12 月総選挙で自由党対労働党に変わった 1 人区の各党の得票率。
2. 括弧の中の数字は得票数を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

表 11 1910 年 1 月総選挙で三つ巴戦だったが、12 月総選挙で自由党対労働党に変わった選挙区における政党の得票率

選挙区	1 月総選挙				12 月総選挙			投票率 の差	自由党 得票率 の差
	投票率	統一党 得票率	自由党 得票率	労働党 得票率	投票率	自由党 得票率	労働党 得票率		
Fife, Western	73.1	15.5 (1994)	47.8 (6159)	36.7 (4736)	61.4	47.0 (5425)	53.0 (6128)	-11.7	-0.8

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。掲出したのは、1910 年 1 月総選挙で三つ巴戦だったが、12 月総選挙で自由党対労働党に変わった 1 人区の各党の得票率。
2. 括弧の中の数字は得票数を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

4

2 人区でも投票率は大きく低下した。表 12 は、2 人区における政党の対決の組み合わせごとに、投票率の変化を示したものである。まず統一党の候補 2 人と自由党候補 2 人が対決したのはバース等 7 選挙区であった。統一党候補 2 人と自由党候補 1 人および労働党の候補 1 人（以下、自由党・労働党ペアと呼ぶ）とが対決したのはブラックバーン等の 8 選挙区であった。こうした選挙区での 12 月総選挙での投票率は、統一党対自由党対決区が -4.38%、統一党対自由党・労働党ペア対決区が -4.61% と、ほぼ同じように低下した。2 つの総選挙における投票率の変化の平均値を検定しても、両者の間に有意な差は認められない。(p=0.825)

にもかかわらず、自由党の得票率については、統一党対自由党対決区と、統一党対自由党・労働党ペア対決区の間で重要な相違があった。表 13 に掲出したように統一党対自由党の選挙区の場合、一つの選挙区をのぞいて自由

党の得票率はマイナスとなった。これに対し、表 14 に見られるように、統一党対自由党・労働党ペアの選挙区では、自由党は、8 選挙区のうち 4 選挙区で得票率プラスを維持した。その結果、統一党対自由党対決区では、自由党得票率は平均 -1.2% 低下したが、統一党対自由党・労働党ペアの選挙区では、自由党の得票率は平均 +1.8% 増加したのである。1 個の外れ値（ハリファックス Halifax 選挙区）を除くと、統一党対自由党・労働党ペアの選挙区の自由党の得票率の上昇は、+3.1% に達する。¹⁰⁾

1 個の外れ値（ハリファックス）を除いた数値を基に、統一党対自由党の選挙区と統一党対自由党・労働党ペアの選挙区における自由党の得票率の変化の平均値の差を検定すると、統計的に有意な差が認められる。（等分散の検定を行うと有意確率 0.001 となり、等分散が仮定できないので、等分散を仮定しない検定を用いると、 $p=0.038$ で、両側危険率 5% において、両者の間に有意な差が認められる。）つまり同じように投票率が下落したのに対し、統一党対自由党対決区では、自由党は得票率を落としたのに対し、自由党と労働党のペアの選挙区の場合、逆に自由党の得票率は上昇し、両者の間にははっきりした違いが見られたのである。¹¹⁾

表 12 1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙における 2 人区の政党の対決の構図

1910 年 12 月 総選挙	1910 年 1 月総選挙					
		統一党対 自由党	統一党対 自由党・ 労働党	三つ巴	その他	無投票
	統一党対 自由党	7 (-4.38%)		1 (-5.5%)	1 (-5.0%)	
	統一党対 自由党・労働党		8 (-4.61%)		3 (-8.0%)	
	三つ巴					
	その他				1 (-2.0%)	
	無投票	2				2

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は該当する選挙区の数。
3. 統一党・自由党には、両党がそれぞれ2候補を立てた場合と、候補を1人しか立てなかったケースが含まれている。
4. 統一党+自由党・労働党は、自由党と労働党がそれぞれ候補を1人に絞って統一党と対抗した選挙区を意味する。ただし統一党の候補が1人の場合と2人の場合を含む。
5. 三つ巴には、自由党が候補を1人に絞らず、統一党の候補、労働党の候補と議席を争ったケースを意味する。
6. 無投票には、同じ政党の候補が2議席を独占した場合と、統一党と自由党が1人ずつたてて、無投票となったケースを含む。

表13 1910年1月総選挙と12月総選挙における2人区統一党対自由党選挙区における投票率の変化と自由党の得票率の変化

選挙区	1月総選挙		12月総選挙		投票率の差	自由党得票率の差
	投票率	自由党得票率	投票率	自由党得票率		
Bath	94.7	49.0	92	48.3	-2.7	-0.7
Brighton	89.3	39.2	81.9	38.4	-7.4	-0.8
Devonport	89.2	48.5	83	48.3	-6.2	-0.2
Ipswich	93.3	51.6	89.9	51.9	-3.4	0.3
Oldham	91.8	59.4	86.8	56	-5	-3.4
Plymouth	87.9	51.4	85.5	47.7	-2.4	-3.7
Southampton	83.5	53.0	80	52.9	-3.5	-0.1
平均	90.0	50.3	85.6	49.1	-4.4	-1.2

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。掲出したのは、1910年1月総選挙と12月総選挙で統一党候補と自由党候補の対決となった2人区。
2. 網掛けは当選者を示す。

表 14 1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙における 2 人区統一党対自由党・労働党ペア選挙区における投票率の変化と自由党の得票率の変化

選挙区	1 月総選挙			12 月総選挙			投票率 の差	自由党 得票率 の差	労働党 得票率 の差
	投票率	自由党 得票率	労働党 得票率	投票率	自由党 得票率	労働党 得票率			
Blackburn	96	28.5	28.1	92.4	26.3	26.4	-3.6	-2.2	-1.7
Bolton	93.8	31.5	30.4	89.3	35.5	34.7	-4.5	4.0	4.2
Derby	92.5	28.3	27.9	88	35.5	34.1	-4.5	7.2	6.2
Halifax	92.6	40.7	38.9	87	33.4	32.3	-5.6	-7.3	-6.6
Leicester	91.8	32.0	31.3	91.8	39.2	38.5	0.0	7.2	7.1
Newcastle Upon Tyne	86.1	28.9	28.1	78.3	28.1	28.0	-7.8	-0.8	-0.1
Norwich	91.5	29.0	28.7	84.3	36.4	35.8	-7.2	7.4	7.1
Stockport	94.2	27.9	28.0	90.5	27.1	26.9	-3.7	-0.8	-1.1
平均	92.3	30.9	30.2	87.7	32.7	32.1	-4.6	1.8	1.9

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。掲出したのは、1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙で統一党候補と自由党候補 1 人、労働党候補 1 人の対決だった 2 人区。
2. 網掛けは当選者を示す。

ではなぜ自由党は自由党と統一党の対決区では得票率を落としたのに、自由党・労働党ペア選挙区の場合には、得票率をあげることができたのであろうか。その背景には、2 人区における 2 票制の仕組みがあったと考えられる。この時期の選挙制度では、2 人区においては、有権者は 2 票を持っていた。そして 2 票を 1 人の候補者に投票することも、2 人の候補者に分けて投票することもできた。統一党対自由党・労働党ペア選挙区においては、自由党候補の得票率と労働党候補の得票率の間には極めて高い相関が認められる。 $(r=0.997, p=0.000)$ となり 1%水準で有意) これは、自由党・労働党ペア選挙区では、自由党ないし労働党に票を投じた有権者の大多数が、1 票を自由

党候補に、もう 1 票を労働党候補に投じていたことを表している。

事実、これらの選挙区に残されている 2 票の記録を分析すると、圧倒的多数の有権者が、自由党と労働党の候補に 1 票ずつに分けて投票していたことが明確になる。表 15、表 16 に掲出したように、こうした選挙区では、自由党の場合、労働党との組み票は、自由党の総得票のうち 1 月総選挙で平均 93.8%に達した。12 月総選挙でも、絶対的な票数は減らしつつも、労働党との組み票は、自由党の総得票の平均 92.3%に達している。労働党の場合も、自由党との組み票は、1 月総選挙で総得票の平均 95.7%、12 月総選挙でも、絶対的な票数は減らしつつ、やはり平均 94.0%にのぼる。統一党対自由党対決区で得票率を落とした自由党が、労働党候補とのペア選挙区では得票率を維持し上昇させることができたのは、ペアになった労働党支持者の強い支持が支えになったものと考えて良いであろう。労働党候補とのペア選挙区では、労働党支持者が、自由党を支えた構図が読み取れる。

ただし子細に見ると、自由党の単独票は、1 月総選挙から 12 月総選挙にかけて、自由党の総得票数が低下しているにもかかわらず、総計で 400 票余り増え、1%比重を高めている。労働党の側も、総得票数の減少にもかかわらず、労働党単独票は、総計で 1000 票増え、1.5%その比重を高めている。自由党単独票の比重の変化については $p=0.18$ と有意差は認められないものの、労働党の単独票の比重の変化については、 $p=0.020$ と両側危険率 5% で有意な差が認められる。全体としては、自由党と労働党の支持者はなお依然強い結束を維持していたことは疑いがない。だが 12 月総選挙における労働党単独票の増加は、両者の間に亀裂が起き始めた兆しとして見ることもできるであろう。

表 15 1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙における統一党対自由党・労働党ペア選挙
区（2 人区）における自由党の 2 票制の分析

	1 月総選挙			12 月総選挙		
	自由党 単独票	自由党・ 労働党 組み票	自由党 総得票	自由党 単独票	自由党・ 労働党 組み票	自由党 総得票
Blackburn	409	11239	12064	327	10225	10754
	3.4%	93.2%		3.0%	95.1%	
Bolton	542	11244	12275	525	9282	10358
	4.4%	91.6%		5.1%	89.6%	
Derby	345	9919	10343	483	8679	9515
	3.3%	95.9%		5.1%	91.2%	
Halifax	595	8673	9504	349	8224	8778
	6.3%	91.3%		4.0%	93.7%	
Leicester	420	13947	14643	728	12316	13238
	2.9%	95.2%		5.5%	93.0%	
Newcastle	805	17710	18779	682	15597	16599
	4.3%	94.3%		6.4%	91.3%	
Norwich	325	10679	11267	650	9270	10149
	2.9%	94.8%		6.4%	91.3%	
Stockpot	264	6239	6645	368	5575	6169
	4.0%	93.9%		4.9%	92.3%	
	3705	89650	95520	4112	79168	85560
	3.9%	93.8%		4.9%	92.3%	

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。掲出したのは、1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙で統一党候補と自由党候補 1 人、労働党候補 1 人の対決だった 2 人区。

投票率と 1910 年総選挙

表 16 1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙における統一党対自由党・労働党ペア選挙区 (2 人区) における労働党の 2 票制の分析

	1 月総選挙			12 月総選挙		
	労働党 単独票	自由党・ 労働党 組み票	労働党 総得票	労働党 単独票	自由党・ 労働党 組み票	労働党 総得票
Blackburn	415	11239	11916	449	10225	10762
	3.5%	94.3%		4.2%	95.0%	
Bolton	425	11244	11864	550	9282	10108
	3.6%	94.8%		5.4%	91.8%	
Derby	219	9919	10189	378	8679	9144
	2.1%	97.4%		4.1%	94.9%	
Halifax	369	8673	9093	241	8224	8511
	4.1%	95.4%		2.8%	96.6%	
Leicester	233	13947	14337	574	12316	12998
	1.6%	97.3%		4.4%	94.8%	
Newcastle	373	17710	18241	585	15597	16447
	2.0%	97.1%		3.6%	94.8%	
Norwich	206	10679	11119	529	9270	10003
	1.9%	96.0%		5.3%	92.7%	
Stockpot	312	6239	6682	348	5575	6094
	4.7%	93.4%		5.7%	91.5%	
票数総計	2552	89650	93441	3654	79168	84067
構成比平均	2.9%	95.7%		4.4%	94.0%	

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。掲出したのは、1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙で統一党候補と自由党候補 1 人、労働党候補 1 人の対決だった 2 人区。

1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙については、大きな政治的な変動がなかったとしばしば考えられている。確かにウェストミンスターの議場では、議席の数が力の源泉である。そうである以上、ハイ・ポリテイクスの観点からみれば、この評価は正しい。だからこそ、アスキス首相は、12 月総選挙を「新たな国民の意志の表現」と捉え、これを踏まえて国王大権を使って貴族院の反対を封じ込めて議会法制定にこぎつけ、貴族院の拒否権を制限する「憲法史上の画期」をもたらしたのであった。¹²⁾

しかし選挙基盤の変動という分析的な視点からみると、2 つの選挙には見過ごすことができない重要な違いがあった。まず投票率の全般的な低下や分布の変化が示すように、12 月総選挙では、1 月総選挙の熱気は維持されなかった。しかも投票率の下落が及ぼした影響は、自由党と労働党で異なっていた。自由党は、統一党との一騎討ちの 1 人区の激戦区で、投票率の低下とともに得票率を落とす傾向があった。一方労働党は、統一党との一騎討ちの接戦区で、投票率の低下にもかかわらず、逆に得票率を伸ばすことに成功した。

また三つ巴選挙から、統一党対自由党ないし統一党対労働党の一騎討ちに変わった場合、自由党候補は、労働党候補が自由党の支持者から得たほどの支持を、必ずしも労働党の支持者から得られなかった。逆に三つ巴選挙が自由党対労働党の対決に変わった場合、労働党が統一党支持者からも票を集め、自由党候補を押しつける例が現れていた。

2 人区でも、統一党と自由党の対決区では、投票率の低下とともに、自由党の得票率はマイナスに沈んだ。一方統一党と自由党・労働党ペアの対決区では、同じような投票率の低下の中で、自由党・労働党ペアの候補の得票率は逆に上昇した。

別稿で論じたように、自由党は 1910 年総選挙の前の補欠選挙では、1906 年総選挙の勢いをすっかり失ってしまっていた。「人民予算」を正面

に掲げた1910年1月総選挙で、自由党はいくらか党勢を盛り返した。だが12月総選挙では、自由党は議席数こそ大きく落ち込まなかったものの、一騎討ちでは統一党との競り合いに敗れつつあった。一方労働党の側は、12月総選挙では、自由党より頑強に抵抗を示し、場合によっては票数や得票率を伸ばすのに成功していた。投票率の低下は、自由党と労働党の党勢に異なった結果をもたらしたのである。

1910年1月の自由党の勝利を支えていた熱気は12月には早くもしばみつつあった。新自由主義の基盤であった自由党と労働党の支持者の結束にも、変化が現れつつあった。こうした変化は、なお小さなものではあった。だがそれは長期的にみれば、1910年以後自由党政権を襲った危機の時代を予兆するものとして、重大な意味を持っている。事実、1910年12月総選挙以降、統一党・自由党の一騎討ちの補欠選挙があった選挙区における自由党の得票率の推移をみると、自由党の党勢は、これ以後第一次大戦直前まで、ずるずると後退を続けていく運命にあった。¹³⁾

注記

- 1) 本稿は、投票率の観点から、前稿「憲政危機と勝利の陥穽—1910年1月総選挙と12月総選挙—」『英米研究』36号、(2012年 所収)の分析を補うことを目的としている。論点が一部重なっていることをお断りしたい。前稿でも述べたように、1910年総選挙の研究としては、Neal Blewitt, *The Peers, The Parties, and the People: The General Elections of 1910*(University of Toronto Press, 1972)をまず挙げねばならない。ブレヴィットの著作は、今なお1910年総選挙とその結果についての最も包括的な研究である。ただしブレヴィットは、獲得議席の観点から、自由党の勝利を高く評価し、三つ巴戦を制する力のなかったこの時期の労働党は、自由党によって「封じ込められていた」と結論づけた。これに対して筆者は、政党の対決類型に着目し、補欠選挙なども対象として、政党の得票率の変化を分析の俎上にのせてきた。筆者の分析によると、1906年以後、自由党の党

勢は実は急速に弱まってきており、労働党と自由党の間の矛盾も少しずつ顕在化してきていた。前稿では、1910年の1月総選挙と12月総選挙における両党の得票率を分析し、「人民予算」を掲げた1910年の2つの総選挙でも、自由党はかつての勢いを取り戻すことができず、勝利の影でその選挙基盤には亀裂が走り始めていたことを指摘した。本稿は、投票率がこうした戦況にどのような影響を及ぼしたかを分析することを企図している。第三次選挙法改正後の選挙制度の下での自由党の再生と衰退の過程についての筆者のこれまでの分析の試みについては、以下の論稿を参照されたい。「近代イギリス選挙史研究序説—第三次選挙法改正後のイギリスの政治変動」（『イギリス研究の動向と課題』、大阪外国語大学、1997年所収）、「アイルランド自治問題とイギリス政治の転換-1886年総選挙における自由党の分裂」（『グローバルヒストリーの構築と歴史記述の射程』、大阪外国語大学、1998年所収）、「19世紀末における自由党の衰退」（『国際社会への多元的アプローチ』、大阪外国語大学、2001年所収）、「自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—」（『英米研究』、大阪外国語大学英米学会、2004年所収）、「1906年総選挙と自由党の再生—20世紀初頭の補欠選挙と1906年総選挙における対決の構図—」（『英米研究』第30号、大阪外国語大学英米学会、2006年所収）、「1906年総選挙における自由党の再生と労働党—二人区の得票分析—」（『英米研究』第31号、大阪外国語大学英米学会、2007年所収）、「1906年総選挙における自由党の選挙基盤—一人区の得票分析」（『英米研究』第32号、大阪大学英米学会、2008年所収）、「自由党政権下の補欠選挙—綻びる自由党の基盤 1906年～1909年—」（『英米研究』第33号、大阪大学英米学会、2009年所収）。「20世紀初頭自由党政権下の社会政策と選挙政治—1906年～1910年1月—」（杉田編『日米の社会保障とその背景』大学教育出版、2010年所収）、「危機の時代の自由党—補欠選挙1911年～1914年」（『英米研究』第35号、大阪大学英米学会、2011年所収）。

- 2) 1910年1月総選挙で統一党と自由党の得票率が1%以内だった激戦区の多くは、労働者と中産階級、労働者と農民が混在して居住し、自由党と統一党の支持基盤が競い合う地域、もしくは自由党の強い地域—ウェールズやスコットランドの周縁に位置する選挙区であった。ロンドン北部のイシュリントン北 (Islington, North) は、もともと労働者が多かったが、1910年ごろには主に中産階級の居住区となっていた。Henry Pelling, *Social Geography of British Elections 1885-1910*

(London, 1967) ,p.38. イシュリントンの西にあたるセント・パンクラス西 (St. Pancras, West) も、鉄道員と中産階級が混住していた。Ibid.,p.49. リバプールの郊外にあたるバーケンヘッド (Birkenhead) にも、造船工場に勤務する労働者と同時に多数の中産階級が居住していた。Ibid.,p.251. チェシャーの街スタレイブリッジ (Stalybridge) は、綿工業の盛んな地帯の中にあつたが、公立学校がなく、保守党の教育改革が支持を集めていた。Ibid.,p.257. ダービシャーハイピーク (Derbyshire, High Peak) も、綿工業地帯にあつたが、街が農村に散在し、保守色が強かった。P.257. レスタシャーのメルトン (Leicestershire, Melton) は、石工、靴産業の労働者の居住地域と農業地域が混在していた。Ibid.,P.221. スタッフォードシャーのリーク地区 (Staffordshire, Leek) は、絹業や綿業の労働者、炭鉱夫や陶工と同時に、地主の保守的な影響力下にある農民が有権者に含まれていた。Ibid., p.218. 一方キングストン・アポン・ハル中央選挙区 (Kingston upon Hull,central) は、銀行家キング (Seymour King) が、買収で労働者の票を保守党に集めていた。Ibid.,p..296. 自由党の強いウェールズやスコットランドの周縁に位置した選挙区としては、ウェールズ北方のイングランドとの境界に位置するデンバイ (Denbigh District of Boroughs) がある。この選挙区はイングランドとの境界に近いため、ウェールズの中ではイングランドの影響が強い地域であった。p.357. 同じくウェールズのモントゴメリー地区 (Montgomery District of Boroughs) では、羊毛産業の雇用者の影響力が顕著であった。Ibid.,p.357. ランドノーシャー (Randnorshire) は、ウェールズの中では例外的に国教会が強い地区であった。Ibid.,p.364. 逆にスコットランドとの境にある農業地帯に位置するカンバランド・エスクデール (Cumberland, Eskdale) では、スコットランドからの移住者が国教会の保守的な影響力をそいでいた。Ibid.,p.342. 外れ値となった3つの選挙区の内、ロンドンの南部のキャンバウエル・ペッカム (Camberwell, Peckham) は、労働者も住んでいたが、どちらかといえば下層中産階級の居住区であった。Ibid.,p.53. エクセター (Exeter) は、自由党の伝統的な地盤であるデヴォンシャーにあるが、大聖堂があり、国教会の影響が強い選挙区であった。Ibid.,p.171.。またスコットランドのアイヤー (Ayr District of Burghs) は、中産階級の多い保守的な地域であった。Ibid.,p.409.

- 3) ただし自由党と統一党の対決区について、同じように1月総選挙で2%以内の接戦区34を対象として調べても、相関係数は $r=0.23$ 、 $p=0.18$ で、有意な相関は

認められない。なおここでとりあげた統一党と労働党の接戦区はいずれも、労働者が有権者の多数を占める選挙区であった。ウールリッジ (Woolwich) は、テムズの河口に位置し、兵器廠で多数の労働者が働いており、1903 年以来労働党が自由党の支持で議席を得ていた。1910 年 1 月総選挙では、兵器廠における多数の解雇で自由党政権に批判が高まり、労働党候補が落選する一因となったとされる。Pelling, *Social Geography of British Elections 1885-1910*, op.cit., p.40. ウォーリックシャーのニューニトン (Warwickshire, Nuneaton) では、世紀転換期には炭鉱夫が増え、1906 年総選挙から炭鉱夫を代弁するジョンソン (W.Johnson) が議席を得ていた。Ibid.,p.196.

- 4) この 4 つの選挙区はいずれも労働者が多数を占め、自由党と労働党が労働者の代弁者としての地位を競っていた。ヨークシャーの綿業の町ハダスフィールド (Huddersfield) では 1895 年、1906 年、1910 年の二度の総選挙で三つ巴戦となっていた。Ibid.,p.301. ダラムのジャロウ (Durham, Jarrow) は、造船労働者と炭鉱労働者の居住区であり、造船会社の家系の自由党候補が議席を握っていたが、炭鉱夫の労働党候補が 1907 年の補選から挑戦を続けていた。Ibid., p.334. ダラム・ビショップア克蘭ド (Durham, Bishop Auckland) はやはり炭鉱夫の町で、労働組合に理解のある自由党議員が議席を占めていたが、その後を労働党が挑戦していた。Ibid.,p.338. グラスゴウ (Glasgow) の南に位置するミッドランークシャ (Lanarkshire, Mid) は、炭鉱の町で、1885 年にケア・ハーデイが議席を得たこともあるが、多数のアイルランド移民が労働組合の力をそぎ、自由党が議席を得ていた、Ibid.,p.409.
- 5) ホワイトヘイブン (Whitehaven) 選挙区は、炭鉱夫、港湾労働者や船員が多かったが、アイルランド移民も少なくなかった。1910 年 1 月に労働党が候補をたてたが、12 月には、コッカマウス Cockermouth 選挙区を自由党に譲る一方自由党がホワイトヘイブンでは候補を取りさげることと合意した。Ibid.,p.331. 1 月総選挙で労働党が自由党に肉薄したことがこの背景となっている。
- 6) ブリストル東 (Bristol, East) 以下 11 の選挙区は、いずれも 1 月の労働党の得票率が自由党よりはるかに低く、ホワイトヘイブンのように労働党に議席を譲る取引の対象とはならなかった。労働党が自由党に肉薄するような力を示した時のみ、協定が結ばれていたことは、両者の協力関係にとって重要な意味をもっている。
- 7) ウェールズの南部、グラモーガンシャー中央 (Glamorganshire, Mid) 選挙区で

- は、1910 年の 3 月の補欠選挙に初めて労働党が挑戦した。1910 年 12 月総選挙でも自由党は挑戦を振り切ったものの票差は補欠選挙より 1000 票余り縮まった。F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918*, op.cit., p.179.
- 8) グラモーガンシャー、ゴウワー (Glamorganshire, Gower) 選挙区は、1900 年にも、労働党と自由党の対決が行われ、労働党が 423 票差まで詰め寄っている。Ibid., p.478.
- 9) ファイフ西 (Fife, Western) 選挙区は、炭鉱夫の選挙区であり、1906 年の自由党対統一党の一騎打ち選挙では、投票率が異様に低かったが (55. 4%)、1910 年に労働党が立候補すると、投票率は 73. 1% に跳ね上がり、1910 年 12 月にはついに労働党が自由党に 703 票差で議席を制した。F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918*, op.cit., p.540.
- 10) 2 人区の戦況については、前掲拙稿「憲政危機と勝利の陥穽」を参照。Halifax 選挙区だけは、自由党、労働党の得票率が大きく下がっていて、外れ値となっている。他の選挙区では、統一党は 12 月総選挙で候補を絞って票を集中しようとした。これに対しこの選挙区では、統一党は逆に 1 月総選挙では 1 人の候補しか立てなかったのに、12 月総選挙では 2 人の候補をたてた。この新たな候補が票を集めることで、投票率が下がった中でも、票を積み増す事に成功したように思われる。
- 11) 1 月総選挙の三つ巴戦から 12 月総選挙で統一党対自由党対決となったのは、ポーツマス選挙区であったが、この選挙区の 2 票制の記録を分析すると、労働党支持者から自由党へと大きく票が流れた形跡はない。この軍港の選挙区では、労働者の間に、軍備増強に積極的な保守への支持が強かったことが伺われる。(前掲拙稿「憲政危機と勝利の陥穽」84-85 頁参照)
- 12) H.H.Asquith, *Fifty Years of Parliament* (London, 1926), Vol.2., p.95, p.106.
- 13) 拙稿「危機の時代の自由党—補欠選挙 1911 年から 1914 年」前掲、48 頁参照。